

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年1月1日発行
(毎月1回1日発行)
第17巻第1号 通巻187号

1

月号

2022



園

晴耕雨読かも霜月のおついたち

赤城山麓そろそろ桑を括るころ

胡麻を干す農のひととき赤子泣く

家へまだあり北天のカシオペア

蓑虫にまた朝がくる朝がくる

鉦彫りの仏に冬のきつね雨

久に來し吉田鴻司の墓に霜

綿虫に遊びごころを誘はる

神楽殿閉ざされて冬立ちにけり

篁の奥まで冬の真つ平

桂郎の忌よ綿虫の飛ぶは飛ぶは

文書かなシリウスがかの山稜に

山頭火ふと梟の鳴く夜は

文書かな

主宰作品

増成栗人

冬林檎

副主宰作品

谷口摩耶

しぐるるや夜明けのニュース聞いてをり

穏やかに歳を重ねて冬林檎

明くる日の葉の準備着ぶくれて

掌の中の小さなかぼちや白秋忌

沢庵を噛む音立てて独りかな

走る子も転ぶ子もみて銀杏散る

山茶花の花びらの数知らぬなり

山茶花の紅あたたかく咲き継がり

来年の手帖を買ひに枇杷の花

エレベーターに滑り込んだる十二月

明けましておめでとうございます。

主宰のご意向に従い、今年から副主宰という大役に就くこととなりました。「鴻」のためにどれだけお役に立てるのか、自信はありませんが、精いっぱい務めてまいりたいと思っております。しばらくは編集長を兼任いたします。どうぞよろしく願いたします。

令和四年 一月一日

谷口摩耶

荒川心星



秋うらら

秋うらら 女人菩薩の山の寺
秋薊この山国のふところに
色鳥や庭師に昼の来てゐたる
吉良の地の魯田に日矢降りそそぐ
つくつくぼふし杜を浄土としてゐたり
横笛の音は晩秋の恋の音ぞ
蓑虫の蓑に雨粒妻癒えず
家事すべて常の暮らしとなりて冬

事もなくゆたかな日なりふかし諸

千枚田の新米でありよく噛んで

啄める杉戸絵の鶏そぞろ寒

麻酔やや残る口中秋さうび

秋ゆくや改札口は人を吐き

水ひろびろと初鴨はまだ疎ら

初鴨の楽しむやうに揺られぬる

素通しに水底の石秋終る

ふかし諸



半谷洋子

俳 作品抄

同人選

ありつたけの月光の降り源義忌 佐藤あさ子
句誌に引くラインメーカー秋深む 水谷はや子
秋深し仕覆の紐の濃むらさき 美濃律子
惣五郎の地に稲滓火のゆるゆると 北村 操
余生とはこんな色かも吾亦紅 山内宏子
約束のやうにちちろの鳴く夕べ 石垣真理子
秋風鈴かくも律儀に音立てて 五十嵐敏子
あさがほの紺天平の色となる 待場陶火
鍼灸師の掌ぬくし鴟の声 横尾かな
沖を見る鹿の眼の澄む秋ぞ 山崎正子
本陣跡の敷石二つ小鳥くる 森 祐司

増成栗人 選

会員選

萩月夜うどんの湯気のなつかしき 鈴木 崇
虫すだく月の光を揺らすごと 山岸明子
くろがねの花器に活けたるつるもどき 青木まゆみ
調剤を終へて戻りの月の暈 藤原明美

新酒酌むあては板わさだけで良し 北城美佐
焼きたてのパンをちぎりて秋の昼 山田ゆきこ
みせばやに丸く生きよと囁かれ 福地タカ
小鳥来てココアの薫り広がりぬ 綾戸五十枝
賞品の野菜山なす運動会 蘭さと子

谷口摩耶 選

「鎌倉③・東歌を歩く」

鈴木 崇

元号が「令和」となり四年が経った。元号としてこなれた頃かと思う。

出典元が『万葉集』だというのは、周知の通りである。巻五の「梅花の歌三十二首」の漢文で書かれた序から引用された。

初春令月 氣淑風和

「初春の令月にして 氣淑く風和く」の「令」と「和」を採り、「令和」である。

考案者は万葉学者の中西進であることも広く知られている。元号が決まってから、『万葉集』を読んでおこうと思いつつ、数年を経たタイピングでようやく中西進の『万葉の秀歌』と斎藤茂吉の『万葉秀歌（上・下）』を読んだ。

「ちよつと」も端的な解説と鑑賞が施された名著であり、万葉世界がぐっと身近に感じられた。その他に解説書もいくつか読みすつかりはまってしまった。

特に自身の関心に引き付けて興味深く読んだのは、巻十四の「東歌」である。東歌は中央から離れた東国特有の語彙や方言を

含んだ歌。作者は未詳で、東国文化の風俗や屈託のない情感が歌われ、他巻にはない異彩を放っている。個人の表現というよりも、集団の場、労働の場などで歌われた、口誦性、輪誦性を持つ歌である。

宮廷を中心とする都にとつて、東国は未知の地として存在した。そのため東歌には異風（蛮風）を感じさせる歌が求められた。東歌の歌風のある種のエキゾチシズムとして伝える意図があったのではとも指摘されている。都側から見た東国理解の一つの在り方が表れており、オリエンタリズムに通ずる意識と評することもできる。

薪樵る鎌倉山の木垂る木を

まつと汝が言はば恋ひつつやあらむ

(三三四三)

東歌には、鎌倉を詠んだ歌もいくつか収められている。そのことは読むまで知らなかった。

この歌は男の片想いを嘆く歌。「松」と「待つ」が係っている。木こりが「この木は松じゃないから彼女は待ってないよ」と周り

で嗟す見立てだ。

ま愛しみさ寝に吾は行く

鎌倉の美奈の瀬川に潮満つらむか

(三三六八)

ここでの「美奈の瀬川」は現在の稲瀬川のこと。由比ガ浜に注ぐ小さな川。江戸電長谷駅脇から路地に入るとひとっそり流れている。河口近くに川の由来を記す碑が建っている。

稲瀬川は、江戸時代の歌舞伎では隅田川に見立てて名前が使われた。なかなか由緒ある川なのである。

鎌倉の見越しの崎の岩崩えの

君が悔ゆべき心は持たじ

(三三〇五)

鎌倉乙女が堅い恋心を誓う歌。「鎌倉最古の社」とされる甘繩神明社に歌碑がある。（碑自体は新しい）。谷戸を背にした高台の境内から由比ガ浜を一望できる。

「見越しの崎」は社殿の裏山を「御輿ヶ嶽」「見越ヶ嶽」と呼んだことから来ているという。「稲村ヶ崎」や「小動崎」とする説もある。

『万葉集』の東歌によって鎌倉時代以前の鎌倉にも思いを馳せることができ、鎌倉歴史散歩を深めることができた気がする。

羽音集

選 谷口摩耶



札幌 北城美佐

盛り塩の白際立ちて秋澄めり
新酒酌むあては板わさだけで良し
栗ごはん形良きもの子の椀に
秋刀魚の目まだ荒波を見てゐるか
手に馴染む七角箸や冬に入る

小樽 山田ゆきこ

喜多方 福地タカ

松戸 綾戸五十枝

札幌 蘭さと子

焼きたてのパンをちぎりて秋の屋
黒葡萄とりたてて言ふ程もなし
久方の親子の時間林檎むく
秋の宵砂糖ひとつの甘さかな
句読点いづくに打つや秋半ば
みせばやに丸く生きよと囁かれ
誰も来ぬ大きな畑草紅葉
コスモスに濃き色のあり瓶に差す
船の旅終へて戻りぬ柿に色
湖をひと廻りして紅葉狩
小鳥来てココアの薫り広がりぬ
ことごとと煮ゆる音聴く寒露かな
密やかに星の煌めく秋思かな
秋風や口紅替へてみたくなる
ゆるやかに盃を重ねて濁酒
犬を抱く人と挨拶秋うらら
賞品の野菜山なす運動会
満身の力をこめて南瓜切る
御持たせのくるりくるりと林檎剥く
抽出しにテレカの眠る秋の雨

茶庵閑話 43

虫丸



巧い句より
いい句を
作れとか
言われ
ますが…

お正月は
属縁飲んて

俳句を作る
上での
心がけだが
実のところ
いい句に
下手な句は
ない

一見稚拙な表現に
見えても
いい句とは
感動と言葉の
調和に成功
している
必ず「巧い句」
なんだ

読んだときに
作者の感動が
素直に胸に
沁み入る句を
人はいい句
だなあと感じる

巧みな句であっても
評価の
定まった
表現の
ような詠みよう
では読者の感動には
繋がらない
という
戒めだね

ナルホド！
胸に素直に
か〜♪

アレレ
食べ物の句しか
浮かんできませんヨ